

平成18年度博物館協議会議事録

1 日時及び場所

(1) 日時 平成19年2月22日(木)午後1時から3時

(2) 場所 兵庫県立人と自然の博物館 実習室

2 出席者および司会進行

委員(敬称略、五十音順)

朝日、岡田、小西、鈴木、館、中村、端、山西(委員長)、吉田

ひとはくおよび社会教育課

岩槻館長、中瀬副館長、坂本次長、江崎次長兼部長、野田課長(社会教育課)、西向館長補佐、田原室長、高橋部長、土井課長、三浦課長、坂本指導主事(社会教育課)、先山室員、岡井主査

司会：西向館長補佐

3 議事

開会挨拶(岩槻)

今年度の3月に5年間の博物館の新展開を終えますが、様々な活動を精力的に行ってきました。この5年間一応一段落しとめをしながら次の目標を考えています。5年間の活動をしながらそれ以後の近未来の博物館としてのあり方として、基本的計画をまとめているので、今後の活動にむけて、ご議論をよろしくお願いします。

事務局紹介

資料確認

委員紹介

博物館活動について

新たな兵庫県立人と自然の博物館基本構想について

以降、山西委員長による進行

(1) 博物館活動について

<報告>(坂本次長)

17年度主要事業、トピックス(共生のひろば、フロアスタッフの活動)、プロジェクト(ワイルドライフマネジメントプロジェクト、共生生物学研究事業)、中期目標、生涯学習の支援、17年の取組・自己評価、18年の予定等の検証、記載したものに從って説明。また、ビジター数等、目標設定、目標の達成度など検証しながら、19年度からの目標設定をし、引き続き進行管理。来年度の事業概要について研究員の個人別成果報告書、事業関連データ(セミナー概要)、ひとはく手帖を用いて説明。

<議論>

委員長：事業評価についてご意見をお願いします。

委員：来館者数は予定の目標を達成し、大きく越えているようですが、主たる要因についての分析はどのようにしているか。

博物館：博物館の事業としては、キャラバン事業(移動博物館)、いわゆる出前講座等、様々なところと共催をし、博物館の研究員も含め、展示物を持って行っている。そこへ来てもらう方もカウントしている。これは、6年前から実施している。要因としては、学校へのPR等に力を入れて、各学校に博物館での事業を紹介し呼びかけがあり、児童生徒の方々の利用が伸びている。また、県民に対しては、各県民局

を巡回し、その県民局それぞれの地域の団体に、勉強会等に博物館の利用促進を依頼する。当館研究員が様々なセミナーを設け、ひとはく手帖に記載しているようなセミナーを実施し、それを周知PRすることにより、それを受講したいという県民の方が利用するというようなことを考えている。

それと、年間3回やっている企画展も、工夫をしポスターを作り、電鉄会社に掲示してもらおう等のPRをしている。特に今年の1月は、恐竜化石が発見され、その恐竜化石の展示は、1月6日から21日間の間に4千人近い入館者があった。このようなことも1つの要因である。その数字は未だ反映されていませんが、様々な要素があり、研究員・館員が努力してPRしている結果である。

委員：フロアスタッフの活動とは、職員が実施しているのか。

博物館：フロアスタッフは現在、人材派遣会社に委託し、常に3人派遣してもらっている。忙しいときには4人勤務し、5人で交代している。現在はたまたま全員女性である。また、ミュージアムティーチャーということで、県の非常勤嘱託として雇用していたが、県の事情により4年前から人材派遣会社に同じく委託し派遣してもらっている。

委員：人材派遣会社の派遣されている社員の能力について制約等はあるか。

博物館：制約は無いが、元々能力を持っている者もおります。また、経験なく来ている者も有り、来てから覚えたという者もおります。基本的にここで、それぞれ自由に発想して、自由に考える。それに対して館員・研究員が指導している。たまたま、絵が上手な人、物語を作るのが上手な人がいたり、そういう人がいて成立しているというところがあります。

(2) 新たな兵庫県立人と自然の博物館基本構想について

<報告> (田原企画調整室長)

これはまだ今年度の事業であり、まだ完全には訂正等が進んでいない。従いまして、まだ少し訂正箇所がある状況である。また、最終版ではないということをお断りをさせていただきます。

この新たな博物館の方向性を示す、長期的に整備すべきソフト、ハード、そういったものにまで及ぶという形、もう1つ新たな博物館の基本構想を作る、今までひとはくがやってきたこと・社会状況・これからの活動に生かしていくか、この観点で少し周辺の状況を整理、どのような方針で実施するのかを生涯学習院というキーワードを出し考えている。

今までの博物館・ひとはくでは何が足りないか・何をすれば良いのか・ソフト、ハードに渡り構想を取りまとめている。実現するための体制、あるいは、その施設等に課題があるか、を取りまとめている。

パワーポイントを使用し説明(ひとはくを取り巻く状況、めざすべき将来像、将来像実現のためのソフト・ハードのあり方、生涯学習院の運営計画)。

委員長：前回の協議会からの基本構想の進捗状況はどうか。

博物館：生涯学習を本格的に支援する、生涯学習院というものを作りたい、それを具体的なプログラムとして、どう見せるかということについては、まだ検討が足りなかった。今年度は、特にその部分を中心に検討を進めた。その中で一番重要な概念が、特にハードの部分で演示という表現があり、それはハードだけではなく、プログラムを支えるために必要なハードである。その演示のためには、プログラムの例を出しておく必要があった。それについては、表形式でプログラム例を示している。

その中で、特に演示の中身については、普段我々が普通に自分の目線で見ているのとは違う見方をしてもらえるようにすることが重要ではないか。実は博物館の驚きとは、ややもすればテーマパーク的に人目を驚かすようなものになりがちである。それも1つの方法であるが、普段見てない視点から、例えば草食獣になれば、一体、肉食獣はどう見えるのだろうか、そのようなことを、演示の中で実現すれば、実はいろんなことが判明する。そういうものを1つの演示のスタイルで幾つか考え、演示というものの

肉付けをした。

委員長：新たな兵庫県立人と自然の博物館基本構想についてご意見をお願いします。

委員：恐竜化石の話にも関係するが、自然の持っているスケール、自然も大きく動いているが、特に時間の動きが非常に我々から見ると遅い。数億年なり積み重なると、とんでもないことになる。自然は、非常にダイナミックに動いている。恐竜の出現等、その時代の背景について、ダイナミックアースというような展示が必要な気がする。恐竜化石を見せるのは確かに面白いが、やはりその中で人間がどんな存在であるということが問題で必要ではないか。その新しいことを実施するとした時、そのような問題はどうか。

博物館：ご指摘のとおりです。ご意見に関しては、「人と自然」というのが博物館の名前でもあり、引き続き1つのテーマであるので、私どもも、それも含め最終的にはこの演示の形に落とし込むというのが必要と考えている。

委員：岩槻館長の生涯学習という中で、体験学習という言葉があるが、図を見たときに思ったが、この学校団体で、例えば発育、自習、学習、好奇心の実現等、学習論で示してあるが、私どもの博物館も、4月からリニューアルし、新しい運営を考えなければいけない。今一生懸命内部の人間を教育しているが、なかなか難しい問題が幾つかある。例えばアメリカの博物館で、子どもたちがある場面で、子どもたちを対象にした空間があった、そこをアシストしてるのが、高校生であった。その場面は、日本では、社会貢献的ボランティア等により参加して子どもたちの相手をするという場面を博物館の中で実現したときに、高校生の行為というは、生涯学習という概念で捉えるのかどうか。

今、特に日本で高校生・大学生の体験という問題が非常に大きな課題になっている。今一方で、大学に文科省が新しい教育概念を大学の中で出そうとしている。その中に地域との連携ということで、学生が地域活動に参加することにより、地域も活性化する。これを教育プログラムで打出す。その意味では、全面的に、今、体験ということが、重要な課題になっている。

昔は、別に体験といわなくとも、子どもの学習自体は、周りに何でも体験するところがあった。しかし、今の子どもたちは、わざわざ社会施設で体験しなければ、体験できないという構造であるのかどうか不明であるが、生涯学習論として、それぞれが体験するという結びつきをどのように生涯学習論の中で考えているのか。

博物館が生涯学習院だということは、実はあらゆる意味において体験学習の場だと考えて良いのか。私はその考え方に近いが、あまり学習論で全部をつなぎ合わせると、概念が狭くなりはないかという印象を持った。もっと広い体験要素があるのではないか。

博物館：言葉の定義に学習とか教育とかも非常にかかわってくる。エデュケーションということで議論する時に、日本語で教育という頭で考えて議論すると、ピント外れになることがしばしばある。生涯学習・生涯教育という言葉があるが、これは広辞苑でも定義はされている。しかし区別されているが、その区別のされ方が生涯学習は一般的な生涯学習であり、生涯教育というのは、1920年頃から使われ、1965年からユネスコが強調したライフ・ロング・エデュケーションというふうに定義されている。

ライフ・ロング・エデュケーションを生涯教育と訳すると、日本語では成人教育になる。そこでいう教育という言葉は、教える側が教えられる側を、その教える側の枠にはめるという教育という言葉の定義どおりになる。ところがライフ・ロング・エデュケーションという言葉は元来そうではなく、日本語に本当に正確に訳せば、生涯学習になる。しかし生涯学習という言葉があり、生涯教育という言葉との概念の差がある。これを踏まえて、日本語の教育ということから一旦離れる。教育が悪いと言ってるのではない。特に西洋に明治以後その追いつけ追い越せという文面から考えて日本は教育に対する力を入

れ、それで100年かかって追いつけ、追い越せで見事に成功させたところである。教育ということは、それなりに効果を持っていたが、それが効果を含んでると同時に何かは抜けてしまったというのが、最近の問題である。その概念からすると、やはり生涯学習でないといけない。学習というのは、元来教えられるものでなく学ぶもの、学ぶ側が主体であるという概念で整備をされたものが生涯学習である。

先ほどの話の中で、高校生が教える人の補佐をしながら実は自分が教えられている。私は過去に大学の中での経験において、その院生を教えるつもりが実際は教えてもらってるということが、多々ある。その意味では、その教育という体系の中で、その知的な体系を一方的に伝達するというものではなく、相互の関連というのが、実は博物館の館員側のフレームにもなる。そういう整備の仕方ができないかということである。

委員：三田では、関学の大学院が、商店街を実験の場に使って、ある種の教育システムを構築しようという、実験が試みられているが、博物館として一体どういう役割を果たすのかというのが、考えざるを得ない問題になる。だから、そういう意味で言うと、商店街が大学生の勉強の場だということになると、県の施設は、今度はどういう考え方針になるか。

博物館：そこが生涯学習の支援である。博物館が何かと問われると自然系の博物館であり、人と物からということになる。優れた収蔵品があり、それが学習の支援に使えるということ、やはりその分野の優れた研究者がいて、その研究者が持っている知見というのは、必要とされたときにはいつでも出せる。それは他の施設とは違っている。

知的な要求というのは、集積された知識の集積というものが、文化の集積というものにいずれ必要になる。その際、自然と環境に関する知見に関しては、ひとはくというのは必要不可欠ですよという、そういう施設であるべきである。

委員：近隣に高校があり、もし関心があればうちの博物館で子どもの相手とか、そういったことしてもらえないかと進めたが断られている。なかなか連携するのも難しいなと認識している。

その現実の中で、どういった体験を提供できるのかということ、やはり生涯学習の大きい概念の中で、我々も考えざるを得ないなというのを改めて痛感しているが。

博物館：ひとはくはその意味では、学校との連携がどんどん広まっている。また、使われる場合もある。

博物館：また、ひとはくから仕掛け、今現在、高等学校で2校と協定を締結し実施している。さらに来年以降、2校追加という方向で現在動いている。

博物館：兵庫県だけ、高大等連携推進事業として実施している。日本中、高等・大学と施設と連携しているが、兵庫県のみ「等」を入れてもらい、兵庫県は大学と博物館も実施することにより「等」が入っている。

委員：この基本構想に博物館が担う生涯学習機関としての役割に、学校教育に対しての支援ということで、2つ構想があり、教材開発・人材育成の支援がある。現場から見て具体的な形にどうなるのかと考えると、まず1つは、教材開発であれば、理科あるいは総合的な学習の時間の教材的なものが想定される。もう1つは、主に理科の教師の、研修の機会の場として研究員の方が出張して、教師の指導をするのか、あるいは教師をひとはくに集めて指導するのか。そのような形を想定してしまうが、具体的にどのような形で計画を考えているか、あるいは、もう既に、やっているのかどうか。

博物館：スクールパートナーというプログラムを現在本館では進めている、まず、この博物館において、先生方をご支援させていただくというプログラムとして、毎年夏に1週間「夏季教職員セミナー」というのを設けて、約20程度の講座を集中的に開催している。

次に、教材開発については、これは1例ですが、平成16年に「教材開発研究会」というものを立ち

上げ、小学校・中学校における教材の研究を先生方と一緒に開発している。

また各種、先生方の理科のグループの開催については、講師の派遣、または来ていただき、博物館での実習を現在でも支援している状況である。

委員：中学3年生の子どもが1年間をかけ里山学習に取り組みました。どんぐりクラブという里山のボランティアの方の協力を得、遊ぶこと・木の葉・虫で遊び等、本当の自然に親しむ活動を、1年間通して総合的な学習の時間の中で学習・教えていただいた。それを今、創作劇・里山の学びの絵本を制作し、発信をするという学習を実施した。

今回、兵庫県より表彰をいただき、学習に拍車がかかったところであるが、それを見ても、最終的に子どもたちが、最初は借物の様にして行っていた里山が、秋からは自主的にこの山に入るとほっとすると言い出した。「何か安心する」「ほっとする」というようなこと、これは小学校の子どもがそこへ入って体験することでしか得られない思いである。

この里山学習の狙いは、やはり里山を見、生きる子どもを育てないといけないと考える。そこで学んだことを別物としてでなく、役立てないといけないと考える。里山に行き、生涯生き続けるときに、親しみを持ち生きていかないといけないと考える。生活の中に取り込む里山にならないといけない。

学習が成立したのは、地域の方・どんぐりクラブさんというボランティアの方の影響が非常に大きい。ボランティアの方に入ってもらい、専門の研究者の方と触れる、その価値・広がり、活動をするということ、非常に大きな意義があった。

委員：博物館の情報を積極的に、開放をしながら、どんどん外に向かって発信をする。あるいはまた出前的な事業は非常にありがたい。今までも近くの方々には生態系の調査をするようなことは多く実施されているようだが、さらに一層積極的に外部へ出て行き、様々な生態系なり、施設への興味を持たせるような運営をしてほしい。

委員：学びの仕組みの構築というのがあるが、これは1つの例かと思うが、これは1人の人間がどのようにステップアップしていくかという話かと理解している。これは、いわゆる地方行政学でも、一般市民の成長の過程を、4段階程度考え、消費者から、入館料払って、ただただ根幹を消費したという段階から、市民として自覚的にその空間をどのように活用するか等、利用者にも幾つかの段階があるということに理解はする。

しかし、もう1つこの議論で、マーケティングの一番基本で大事ではないか考える。ボランティアが自立的に組織を作り始める際、組織論へ発達していくという問題が多分発生するのではないかと考える。この中で考慮すれば良いのではないかと考える。

委員：今までのひとはくは、ひとはく中心に発信していたことから、むしろ外からひとはくに向け、視点を大きく変えるというのが、転換点として基本構想を示されていると考えている。

その中で2点、学習院及び自立的な博物館という言葉が印象に残っている。学習院で生きがい学習という言葉が使われている。7万円の月謝払っても年間600人くらい民間で集まる講座があり、学んでいる方がいる。この状況を見ても、ひとはくの中で、団塊世代向けの表記のプログラムが出来ないか考える。各種生涯学習センターが、ほとんど定員を越えている。越えた方が、県の講座へ行く。それでもまだ足りないという状況がある。団塊の世代ほど疲れ切ってる世代はない。

そんなことも含め、この博物館の中で団塊世代向けの1年から3年程度に渡る長期講座を設定すべきではと考える。その開発のときに大きな宝物が出てきたのが恐竜化石かと考える。子どもから大人までシニアも含め3年かけ市民恐竜博士を育成、情報の発信、恐竜模型を壊したり・組み立て等、この構想はすばらしいと考える。また、非常に生きた学習になるのではないかと考える。

それから、2つ目の自立的な博物館ということについても、見る立場から参加する立場になるということで、すばらしい考えかと考える。ここにまだ具体的な計画は出ていないが、これから具体的な計画が立つと思うが、その際ぜひ入れて欲しいのは、一般市民からの持ち込み企画である。ここで受け付け、そしてこの持ち込み企画と自分の関心のあるテーマが一致したものを1つ、1年間に1本必ず研究員の方々は共同の研究をする。それに何らかの助成金をここで準備する。何か研究するということが1つ必要ではと考える。この館内の中で、人材を育成し、そして、ここのマネジメントにかかわる人を育成していくというステージがある。その中からフロアスタッフが育てば非常に良いのではないかと考える。つまり、いろんな学習機関があるが、学びだけではなく、学びが社会化していくという具体的な計画が必要かと考える。

博物館：ご指摘のとおりです。特に一番最後のマネジメントにも、参画していただくというのは、私どもも体制のところでは課題があるというふうに、言いましたが、実は第4章の中で、少しそのことも明記している。ただ、具体的に、どのような形の運用をしていけば良いのかということに関しては、まだ頭で考えた部分でしかないというところがある。それは逆にいえば、例えば、実施されているようなことから大変私どもが学ぶことが多いと考えている。その部分はやはり次の大きな課題だと考える。それに関連して、館の動きをご紹介すると、NPO法人が様々な形で私どもの事業に参画というより、主催していろいろやっている事実がある。いつまでもNPO法人だけでは、やはり広がりが無いという事実である。連携活動グループ等、そういうグループを養成していくという段階にある。そのグループが少し成熟すると、グループが1つずついろんな事業をやっていくと、全体としてのマネジメントをどうするかという問題にも実はすぐ直面しそうな予想もある。そういう現実の問題を多少、糧にしなが、もう少し先進的な非常に参考になる事例がたくさんあるので、そういったものを加味し、少し大胆に、マネジメントを見直していきたいと考える。

委員：新しい生涯学習の概念に話がありましたが、一番低い年齢の乳幼児は、展示及びプログラムについては難しいのではないかと考える。そこで、新しい施設を造るにあたり新しいプログラムを考えるにしても、その点、何か工夫を考えているのか。

博物館：幼児期の小さな子どもたちに対するプログラムは、ひとくにはないのが現状で、本格的に取り組まなくてはいけないということで、来年度からはそのようなことも試行しようとしている。今回の検討の中で、普通の展示でそのまま見せるのは難しい。それだけに、今回1つ非常に大切にしているのが、体験の提供である。その体験の提供のプログラムとは、年齢層にかなり組みやすい部分がある。今までの展示よりはそのような層も巻き込みやすいのではないかと考えている。ただ、幼児だけといっても、親も一緒にという、親子を対象にしたプログラムを、当面媒介しながら、それで経験を積んで、最終的に本当の子ども向けプログラムができればよいと考える。5年間程度の期間で考えると、当面は親子対象を中心にし、少しずつ本格的な子ども向けプログラムに進めばよいのではないかと考え、来年の計画で、このプログラムの中身を詰めていきたい。年齢層・団塊の世代など、具体的なニーズのある層を含め、どのようなプログラムが用意できるのかというところをもう少し詰めて行く中で、よりはっきりさせる考えである。

博物館：来年度から実施する予定である。それというのも、こんなに遅れているのは日本の博物館だけである。欧米ではアンダーファイブキッズプロジェクトというようなものが実施されている。そこで兵庫県もこの4月から小学校3年生を重点的に、幼稚園と保育所にも環境教育学習が始まります。もう議論するより、博物館としてはぜひ実施すべきである。

博物館：現在の取り組みは、非常に幼児向けプログラムは難しいということを感じている。現在試行的に

ではあるが、何とか試行錯誤しながら取り組んでいる。

現在、近隣の幼稚園の年長組と、年間7つの講座を実施している。その中で幾つかそのプログラム、今、可能なものを例示しているが、その中に幼児教育プログラムとして、子どもたちが学んでいくプログラムとして、有効なプログラムは今後こうあるべきだということを我々がこれから課題にしていけないといけないと考えている。

委員：団塊の世代のプログラムについて、現実的になると考えるが、プログラムという形となると、今までの学芸員の活動等変わると思うがどうか。

博物館：団塊の世代だけではないにしても、来年度から大学院が、土曜、日曜開校し、単位を取得する、このような団塊の世代だけの世代だけでなく、幅広い層の人に大学院を受けてもらうようなことを実施していきます。現在、ひとはくが実施している活動の中で、特に先ほどの連携活動グループには、随分と団塊の世代の方に関わっていただいている。あるいは、それが期待できるというふうに考えている。

委員：お願いしたいことがあるが、パンフを読んでいて、朝来市の利用度というのはまだまだ低いと改めて思います。来年度とか再来年度とか、自然の中の物に接して何か驚く・感動を覚える等そのようなことをテーマにする授業をする。しかし、何も自然の仕組みに気がつき、そこから何か入り口になれば良いという話を進めてきたが、ひとはくに今後ご支援をお願いしたい。

自然の仕組み・学んでもらって遊べる広報を出す等、それが自然のことについても発言出来る人を養成しないといけない。ひとはくがあるのに、活用せず自然の仕組みのわかってない人が地元にかくさんいる。またご支援をお願いしたい。

博物館：直接関係できるかどうかということが1つポイントだと考えるが、来年度以降、県民局単位に、キャラバン事業で、5年間は同じ研究員を同じ地域に配置しようと考えている。その中で、有機的に地域の方等と一緒に様々な事業を展開することで動いている。その中で一緒に事業展開することも可能かと考える。

閉会挨拶（岩槻館長）

今日だけに限らず、また何かお気づきのことがありましたら随時いろいろなコメント等をお願いいたします。最終的には560万人の県民に伝えるためには、一緒に学べることが重要かと考えます。

さらに、この基本計画の委員会の委員長は三浦朱門さんであり、巻頭文にも書いていただいているとおり、ひとはくが兵庫県にとっていい博物館になっていくということが、日本の博物館をますますいいものにしていく力になればというふうにしております。幸いにして、やっていることがあちこちで認めていただいて、県からも非常に賛辞をいただいております。特に恐竜化石が出てきたときに、最初にその持ち込み先ということが最近心配されましたが、それも、今こうして発掘しまして、今後、夢を持って動きたいと思います。どうぞよろしくをお願いいたします。今日は本当に貴重なご意見をいただきましたこと、また、ご意見を踏まえながら、さらによりよい方向で展開していきたい。今後も継続的にご指導などいただければ幸いです。どうもありがとうございました。